

【報告】 AAPSO 60周年記念集会について

上記の会議が2018年1月14・15の両日、カイロのピラミサ・ホテルで開かれた。滞在費を全額負担するとして常設書記局がよびかけたもので、次の各国の平和・連帯組織の代表が参加した。

- 1、 バーレーン（1人）
- 2、 キプロス（2人）
- 3、 エジプト（書記局含め30人プラス）
- 4、 ギリシャ（1人）
- 5、 インド（2人）
- 6、 イラク（5人）
- 7、 日本（1人）
- 8、 レバノン（3人）
- 9、 モロッコ（1人）
- 10、 ネパール（1人）
- 11、 パキスタン（1人）
- 12、 パレスチナ（1人）
- 13、 ロシア（4人）
- 14、 スリランカ（2人）
- 15、 チュニジア（2人）
- 16、 世界平和評議会（1人）

またベトナム AALA 連帯員会のグエン・ティビン会長ら多くの組織からメッセージが届いた。

★14日の開会総会

ハディディ議長が挨拶した。60年前から前進した民族独立のたたかい、唯一の残りの課題がパレスチナだ。植民地主義を克服して独立と経済の持続可能な発展、社会正義の実現にむけて共同の努力を続けよう、一方で世界経済の危機とともにテロと暴力の拡大、地域紛争、国家の解体などの課題に直面している。今日的な連帯の目標として①テロと暴力とのたたかい、その温床除去への取り組み②米のエルサレム首都移転に反対、パレスチナ人民支援の強化を③紛争の話し合い解決のよびかけ④人民の利益にたった経済発展⑤民主的社会の建設⑥技術協力⑦環境破壊とのたたかい⑧他国への文化の押し付けに反対⑨組織が消滅した国での委員会の再建⑩非同盟運動への積極的な参加、などを挙げた。

続いてアラブ連盟の代表、駐エジプト中国大使、エジプト外務省（外郭団体の次官クラス）の順で挨拶した。アラブ連盟は最近のエルサレム問題の重要性を強調した。駐エジプト中国大使の出席は注目された。ロシアの大使もきていたが、演壇にのぼらなかった。中国大使はバンドン会議以来の中国と AA 諸国との連帯の歴史、最近の首脳同士の相互訪問で深まったエジプト中国関係、パレスチナ問題、中国共産党 19 回党大会で打ち出された AA 諸国との関係強化の外交、の 4 つの柱でかなり踏み込んで演説した。

★第 2 セッション

ヌリ書記長が、準備された「討論資料」を補足するかたちで報告した。創設以来の反帝、反植民地主義、AA 独立運動に中心的役割を果たした時期、ソ連崩壊後、米国の一国覇権主義の下での闘いの時期、中国やロシア、BRICS の台頭による新しい情勢の特徴と課題を解説。現在の課題として、国際テロの拡大とエルサレム問題に象徴されるトランプ政権の人種差別的な覇権主義とのたたかい意義を強調した。北朝鮮危機にもこの流れでふれ、無責任なトランプ政権の言動で不測の事態が起こる危険があると警告した。富の集中と格差の拡大で修正を求める世界の人民のたたかいが広がる。このなかで台頭する中国が世界的な役割を増大させて、米国の覇権主義に対抗しているのは期待がもてることだと強調した。「討論資料」では、ロシアの役割が強調され、中国やアジアについてはほとんど言及がなかったのだが。

続いて、エジプトの国際政治学者が国際情勢の特徴をそれぞれの立場から解説。グローバル資本主義と米国の介入主義強まり、一方で中国の発展と、他方ではトランプにみられる極右勢力の台頭がある。このなかでバンドン精神にもとづく国際関係の基礎が大事になっていると強調した。またもう一人エジプトの国際ジャーナリストが国際テロの背景と米国の核兵器開発の問題点、難民問題と欧州諸国の対応（偽善）、パレスチナ問題とキプロス問題を解説した。

★第 3 セッション

午後、ナセルの生涯とその業績をたたえる映画。2 人のエジプト人歴史家による講演があった。一人はバンドン会議でのナセルの活動から AAPSO の設立に至る経過で、彼がアジアとアフリカの民族運動を結び付け、カイロがその中心拠点となったこと、第 1 回 AA 人民連帯会議によって、反帝国主義、反植民地主義の旗のもと各国の独立運動の相互支援と共存の精神のもとに、核兵器反対と外国軍支配の反対という共通の戦略目標が定められ、国際連帯の基準と基礎が固められたことの意義が開説。もう一人は、ナセルがどのような社会観をもって運動に取り組んだかを特徴つけた。

この後、レバノン、スリランカ、インドの代表が発言。レバノン代表はシオニズムによる占領、支配の糾弾、スリランカはロンヒンギヤ問題の深刻さを指摘。インドの代表は、平和運動の課題として反核兵器、反外国軍事基地のたたかいの強化を訴え、またラテンアメリカへの米国の干渉に反対する運動の強化を訴えた。

(2日目)

★パレスチナ問題の特別セッション

カイロ大学の教授による各国の反応などの現状報告に続き、昨年モロッコに設立されたAAPSOのパレスチナ人民支援委員会が活動の報告をした。このなかでエルサレム問題での抗議の広がりを評価するとともに、今後の留意点として、テロと過激主義への警戒、とくに広範な西欧の市民組織との協力の必要性を強調した。欧米全体を人種主義とする立場ではなく、アラブやアフリカの弱い諸国はまだ米国の経済支援を必要としている国が多いなかで欧米の市民、平和組織との協力をえることは不可欠だなどが強調された。パレスチナの代表は、統一政府の問題を報告するとともに、欧州にはパレスチナの国家承認に動く国は8カ国に増えていることなどを報告し、支援を求めた。設立された支援員会を軸に、全世界での統一行動、イスラエル糾弾をすすめていくことを確認した。

★第4セッション

各国の代表が、AAPSOの意義とそれぞれの国のたたかいを報告した。日本は最後のセッションの最初に報告し、要旨、次のように発言した。

(田中発言の要旨) 集会への招待に感謝する。歴史を振り返った昨日の講演を聞いて、AAPSOの維持と発展に果たしたエジプト国民と政府の貢献の大きさに刺激をうけ、日本としても運動に関わったことに誇りを感じた。討論資料についての意見は、別に提出した「当面の行動指針」の中に述べられているので参考にしていきたい。そのうえで2, 3の意見を述べる。第一にAAPSOが果たした積極的な面についての評価を民さんと同じだ。特に創設以来、米軍の軍事支配からの脱却と本土復帰を求めていた沖縄復帰運動がAA連帯運動の重要な国際課題として位置付けられ、毎年4・28国際行動として各国で取り組まれたことは日本国民への大きな励みとなった。沖縄は復帰したが、なお巨大な米軍基地をかかえて重圧に苦しみ、基地のない沖縄をめざしてたたかっているので、引き続き支援を願いたい。第2に、北東アジアの緊張、北朝鮮による挑発と米国による核脅迫の応酬は周知のとおり。我々は軍事解決に絶対反対で、双方に中止と対話に解決を求める。今年国内の平和勢力が直面しているのは憲法9条

を守る戦いだ。安倍政権は北朝鮮の脅威を最大限に利用しながら、米軍との軍事一体化をすすめて、沖縄の米軍基地建設を開始した。そのうえいよいよ 9 条明文改憲にのりだした。9 条は日本の平和主義のシンボルであり、東アジアの平和の保障だ。この戦いへの支援をお願いしたい。討論資料について、核兵器禁止条約が 122 カ国の参加で採択された意義を追加したい。最後にパレスチナ支援の闘いについて一言。日本でも不法な占領とトランプ政権の暴挙に国民の批判が高まっている。が正直いってパレスチナの国家承認を政府や議会に求める運動はなかなかすすまない。署名を広げると賛同を得る前に、さまざまな解説が必要で疑問にこたえなければならないからだ。専門家をよんだ講演会を開いているが、立場によってさまざまな立場があって、なかなか納得した行動提起につながらない。こうしたなかで安倍政権が従来の中立的な立場をかえて親イスラエルになり、日本企業によるイスラエルへの武器輸出や共同研究を承認した。こうした動きに抗議する運動に取り組みたいと思っている。(以上)

★関連情報

ホールのスピーカーの声が大きすぎて同時通訳が聞こえず、アラビア語圏の代表の話はよくわからなかった。イラク、チュニジア、リビアの代表はスリランカでの第 9 回大会であった同じ人たちだったが、通訳がいなくて交流ができず、どういう組織や活動実態なのか、今回もわからなかった。

一流ホテルでの滞在費をまかなえる書記局の一定の基盤を感じた。年間 60 万ドルの予算がエジプト政府からでているとの話。ヌリ書記長は高齢で話がまともにはできないくらいだが、頭は健全そう。ハイデラバードでの第 8 回大会で引退し、インドの活動家に交代する話があったが、いつの間にか立ち消えになったという。

★個別の交流

インド、パキスタン、スリランカ、ネパール、パレスチナの代表と個別に話をした。インド、パキスタンは核禁条約への加入をどう働きかけるか、核保有してから戦争が減ったという議論にどう反論するかなど、スリランカは中国の進出をどう考えるか、を話した。ネパールは最近の選挙の前進と漸く安定しそうだという話だった。パレスチナ PLO 国際局と、日本での取り組みの現状を話した。今後、連絡を密にし、折に触れて相談しようということになった。

★テロ対策で厳戒のカイロ市内

テロ対策特に、前政権支持者、同胞団関係への監視が強い。第一回 AA 人民連帯会議が開かれたカイロ大学の講堂の写真をとりいいしたが、キャンパス内に入

るのにも許可が必要。外観を写真に写したら、私服の警官すかさず近づいてきて
I フォンをチェックされた。(以上)